

第6回ASME-JSME熱工学合同会議

The 6th ASME-JSME Thermal Engineering Joint Conference

吉田 英生*
Hideo Yoshida

1. はじめに

日本機械学会(JSME)熱工学部門と米国機械学会(ASME) Heat Transfer Divisionとが合同で企画する第6回の熱工学会議(略称AJTEC2003)が、2003年3月16日~20日、ハワイ島で開催された。歴史的には、この会議は1983年から4年おきに開催されるようになったもので、第1回オアフ島、第2回オアフ島、第3回リノ、第4回マウイ島、第5回サンディエゴと、日米双方からの出席を考慮してハワイ諸島あるいは米国西海岸が開催地となってきた。

図1に示すように、ハワイ島はハワイ諸島の中で面積は最大の島であるが、ホノルルのあるオアフ島と比べると、人口も店も観光客も少ない。島西部のコナ空港から会場となったHapuna Beach Prince Hotelまでは車で40分ぐらいの距離であるが、その間、信号は確か2箇所、道の両側は不毛の溶岩台地という何もないところである。茶色い溶岩の上に、白い石を並べた記念の落書(落置?)だけが目を楽しませてくれる。この島を象徴するのは、すばる望遠鏡が設置されているマウナケアとマウナロアの2火山である。

会議の内容に話を戻すと、対象となる研究領域は、文字どおり熱工学全般にわたるが、伝熱がかなりの割合を占め、燃焼がそれに続く。このため、やはり4年おきに開催される国際伝熱会議に対して1年ずれた翌年開催の准国際伝熱会議と認識されることも少なくない。このような背景のもと、本会議は世界をリードする日米の機械工学系の熱工学研究者が一堂に会する最大規模の会議というだけでなく、環太平洋さらには中東や欧州からの熱工学研究者も集う重要な国際会議としての地位を確立していると言えよう。発表論文数376編(うち8編はキーノート論文)、参加者数388人(20か国)という本会議の数字も、それを物語っている。

2. 日本側がリード学会としての第6回会議

本会議の二人のConference Co-Chairは、西尾茂文東京大学

教授とUCLAのAdrienne Lavine 教授、また扇の要とも言うべきSecretary-Generalは、佐藤勲東京工業大学教授である。

運営面での特筆すべきこととして、今回の会議はこれまでの一連の会議の中で初めて、JSMEがリード学会となった点が挙げられる。本シリーズは会議名こそ日米平等の対称的なものとなっているが、従来はASME事務局本部の強腰な運営に押し切られてきたという面が強かった。しかし、今回は西尾・佐藤両教授の粘り強い交渉に加え、ASME側の委員長のLavine教授がASME事務局本部との間で非常に好意的な調整役を演じていただいたという幸運も加わり、JSMEが初めてのリード学会となって成功を収めた。

ハワイ諸島という場所は、日本人のみならず米国人にとっても魅力あるところである。高い旅費と貴重な時間を代価に出かける国際会議において、観光の要素は切り離すことができないことは事実であり、むしろ風光明媚なリゾート地での開放感がお互いの友好を深める上で極めて有効に作用するともいえよう。今回、ハワイ諸島では4回目の開催となったが、ハワイ島が選ばれた理由の一つとして、俗化したホノルルとは異なった落ち着いた場所で会議を開催したいというLavine 教授の強い希望があったと聞いている。

しかし、このように日本から遠く離れ、さらにホノルルのように何でも揃う場所でもないところで開催するには、それなりの苦労がある。このため、西尾・佐藤両教授は信頼できる旅行社と全面的な協力体勢を敷いて準備を進められた。

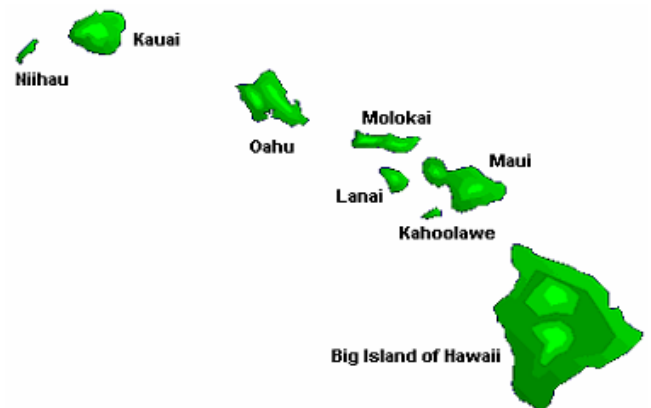


図1 ハワイ諸島

*京都大学大学院工学研究科機械工学専攻教授
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
e-mail yoshida@mech.kyoto-u.ac.jp



図2 AJTEC2003のホームページ
<http://www.jsme.or.jp/tesd/AJ2003.html>より



写真1 レセプションでのLavine 教授と佐藤教授

3. すばらしい論文投稿・査読システム

筆者はたまたま組織委員会の一員でもあったので、その準備から会議当日の運営までの作業を近くで垣間見ることができた。本会議の成功は西尾・Lavine 両教授を頂点とする関係者全員の協力によるものであることは言うまでもないが、佐藤教授の獅子奮迅の活躍について、その一端をぜひとも紹介しておきたい。

JSMEホームページ上(図2)に設置された論文投稿・査読システムは、インターネットの機能をフルに利用した新世紀の国際会議にふさわしいものであった。まず、論文投稿とともにPDFファイルがアップロードされる。査読者にはパスワードが通知され査読結果やコメントをホームページ上から電子メールで返信する。セッションオーガナイザーが複数の査読者のコメントをチェックした後、佐藤教授を経て著者に採否ならびにコメントが通知されるというシステムである。このシステムはもちろん自動化されている部分も多いが、論文のアップロードや査読者の割当など佐藤教授ご自身が手作業しなければならない項目も少なくなく、総数400に近い論文を1人で処理されたことには、敬服するばかりである。

4. 予想外のイラク戦争の影響

パワーポイントによる発表が当然のこととなった現在、液晶プロジェクターは7つの講演室+予備用に、組織委員会委

員が分担して日本から持参した。プリンター、コピーも同様である。イラク戦争が始まるか否かというタイミングで日本から空輸したAbstract集やCD-ROMと一緒に、レーザーポインターが同封されていた。このレーザーポインターは、最初はハワイで入国できずに足止めをくらうという予想外のことも起きた。

ビザの関係で中国からの参加予定者は全員がキャンセルとなり、日本からも留学生や企業の方々のキャンセルが目立った。このような不運が重なり、6件中4件がキャンセルというセッションも生じた。会議日程を1日残す3月20日には開戦となり、組織委員会も無理をせず早めの帰国をアナウンスせざるを得ない状況になった。



写真2 Closingでスピーチする西尾教授とLavine 教授

5. むすび

以上のように周到な準備が進められた会議ではあったが、開催時には不運にも国際情勢の影響をまともに受けた会議ともなった。しかし、日米を中心とする研究者が400人近くも集まる会議は、この機会をおいて他にはなく、そのことだけでも本会議の意義を十分にあらしめていると言える。

海沿いのホテルに隣接する小高い丘で開催されたバンケットでは、ハワイ特有の強い風が吹き荒れる中、魅惑的なフラダンスや、たいまつをあやつる勇敢な男のショーもあった。熱工学会議の参加者の一人としては、あの男がなぜ火傷をしないのか、肉体の鍛錬のたまものなのか、精神の勝利なのか、それとも何か業界秘密があるのかとも考えてしまったが、とにかく見るもの聞くもの触れるもの、全てに感動を覚えた。

正味4日プラスαの会議は、またたくまに楽しく過ぎたが、手元に残るAbstract集とCD-ROMは、本会議の永遠の記録である。しかし、本会議での最大の収穫は、異国の友人達と久しぶりに会えたこと、また新たに友人となった相手には“Let's keep in touch!”と言って別れることができたことであろう。